

あめつちのうた

近畿地方では1951年の統計開始以来、最も早い梅雨入りとなりました。私は雨が苦手なので、5月の半ばからなんて早すぎる...とがっかりしています。それでも雨って大事なんだよなぁ、と思わせてくれるのが「あめつちのうた」。お仕事小説であり、野球小説であり、何より青春小説なんです。主人公の雨宮大地は運動が苦手。そんな彼が高校卒業後、阪神園芸に就職します。関東出身（しかも巨人ファン）の彼がなぜ、わざわざ阪神の本拠地へやって来たのか。それは高校時代に憧れの人に出会ったから。いざ就職したはいいものの、すぐに仕事ができるようになるわけでもなく、まわりの先輩にいろいろ教えてもらったり怒られたり。そんな中で知るの、甲子園のグラウンドの最大の武器が「水持ち良く、水捌け良く」ということ。1年に1回、耕運機で25cmほど掘り起こし、雨で満遍なく水分を与えてから均す。すると、「不透水層」という水を通さないカラカラの状態ではなく、水分も弾力もある強い地面になるのだそうです。そのおかげで、試合中に雨が降ってきてもべちゃべちゃにならず、イレギュラーも起こりにくく、選手の足元も支えられる、という素晴らしい環境が整えられます。雨が降ったあとでもすぐ再開できる状態にする鮮やかな作業から「神整備」と呼ばれていますが、それはその日だけでなく、毎日土の様子を見ているからこそできること。土も仕事も人生も日々の積み重ねなんだなぁ、としみじみ感じます。グラウンド整備のほかにも、高校野球のときの校旗掲揚や、けが人がでた時の担架係もお仕事の1つであること、天然芝を使っている球場が少ないことも知りました（ちなみに、「ほっともっとフィールド神戸」は内外野天然芝だそうです。そんな球場は国内に神戸を入れて3箇所だけ！）。どうしてみんな甲子園に憧れるんだろう、高校野球ってすごいなぁ、と毎年ひとごとのように感じていましたが、これだけ整った場所で、伝統の大会に出られるということは確かに特別なことなんだろうと思うようになりました。大地のまわりの人たちもいい味を出していて、スポーツ小説にありがちな「情熱！」「熱血！」という空気ではないので、スポーツ音痴な私はちょっと共感しながら読みました。友達には大学野球でエースを任されるような人もいるし、ピールの売り子をして歌手を目指す人もいるし、同僚には高校野球で名を馳せた元選手もいます。認めてもらえないことのしんどさ、思い通りにならないことのはがゆさ、大事な人を守りたいと思う強さ。阪神園芸での1年を通して、みんなが「それぞれの持ち場」を守りながら、未来のことを考えている姿に声援を送りたくなります。今年の夏、高校野球が開催されたら、必ずグラウンドに注目しよう、と思いました。

朝倉 宏景

1984年東京都生まれ。東京学芸大学教育学部卒業。2012年『白球アフロ』で、第7回小説現代新人賞奨励賞を受賞。2018年『風が吹いたり、花が散ったり』で島清恋愛文学賞を受賞。

阪神園芸株式会社

西宮市に本社を置く、阪神電気鉄道系列の造園会社。阪神甲子園球場、阪神鳴尾浜球場、ほっともっとフィールドなどの芝生管理や、公園・施設の都市緑化活動などが主な業務。